



〇〇をするのがよいでしょう』と言い切ることは、基本的には難しいと思われます。

少し話がそれますが、先日ちょっとしたきっかけで、このマガジンの編集員かつ執筆者である千葉さんから、家族療法についてのショートレクチャーを受ける機会がありました。家族療法については、これまで聞きかじって多少の知識はあるくらいに思っていたのですが、実際には、基本的なことから知らないことばかりでした。とても面白く、また、『構造的家族療法』の概念の中に、K式の検査場面を表す言葉である『構造化された観察場面』と通じるものがあると感

じたりもして、勝手に家族療法を身近に感じるようになりました。その中でとくに印象に残ったのが『円環的因果論』という考え方です。以下、発達相談において「円環的因果論」の視点が活用できるのでは、と感じたことを述べていこうと思います。

例として、『保護者が過保護なため、子どもが主体的になりにくい』という因果関係を想定したとします（あくまで想定であり、保護者が過保護であれば必ず子どもは非主体的になるという意味ではありません）。この因果関係を図にすると図1のようになります。

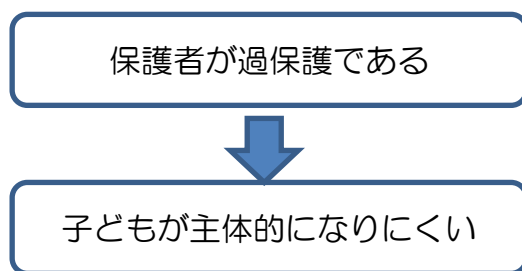


図1. 発達相談における直接的因果関係の例

この因果関係を直接的に踏まえると、『過保護にせず、子どもの主体性を育てましょう』という助言になるかもしれません。このようなシンプルな助言について、影響を受ける方もいれば、受けない方もいます。提示された情報に対して素直に（あるいは疑問なく）受け取る方であれば影響を受けやすいですし、あるいは“専門家の先生に言われたので”という権威づけによって影響を受ける方もおられます。ですが、その一方で影響を受けない方もおられます。前述したように、保護者が保護的であれば必ず子どもは非主体的になるというわけではないとい

うことも事実ですし、“専門家”に対する意識も人それぞれですので、影響を受けない方がおられても、それ自体はまったく不思議なことではありません。

さらに、ここまでは非常にシンプルな因果関係をもとに話を進めてきましたが、人間がすることというのは、通常はこんなに単純ではありません。保護者が保護的になってしまうのには、何か背景があると考えた方が妥当でしょう。要因として考えられるものは、個人的要因から環境要因、さらに時間的経過まで含めると相当な分量になると思われます。

少し具体的に考えるために、これもあくまで例として、母親が保護的になっている場合を想定してみます。『母親が過保護になる』こと背景として、例えば『父親が育児にあまり参加しない』という要素があるかもしれません。そのことから、母としては「育児に関して自分だけで考えたり対処しないといけない不安や不満」が生じる可能性があります。不満の結果として、「父-母」間の関係が不調となり、「母-子」間が強化される可能性があります。また、育児の方針に不安があると、子どもの抵抗が強い場面では一貫した関わりを取ることが難しく、結果的に子どもの訴えに対して譲歩しがち

になるかもしれません。

「母-子」間の強化や、育児に関する不安の結果として、子に対して甘くなりやすくなったり、過保護になる、という結果が生じるかもしれません。また「母-子」間の結びつきが強化されたことで、父親からするとより育児には参加しにくい（あるいは参加する必然性が少ない）状況になる可能性もあります。このように循環する因果関係を図示すると図2のようになります。このような因果関係のとらえ方を「円環的因果論」と呼ぶわけです。

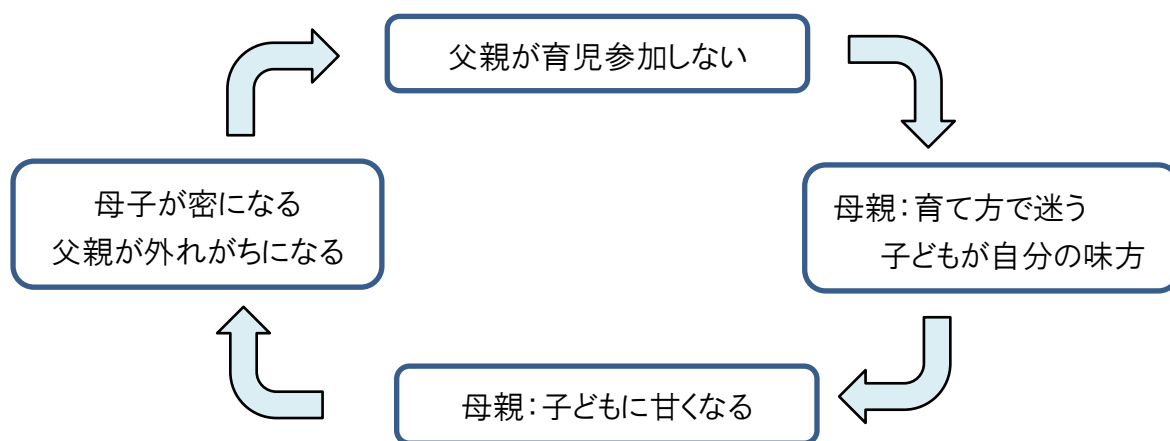


図2. 発達相談における円環的因果論の例

さらに、重要だと思ったのは、この「円環的因果論」を構成する個々の問題に対して直接的に対応しようとするのではなく、この円環的因果の中に“よい変化”が生じるように関わる、という視点です。

図2のような因果関係が見えたとしても、我々はいよいよ個々の問題に直接対処しなくなりやすいところがあります。例えば、「父親が育児参加しない」と聞けば、養育に

おける夫婦協力の重要性を説いたりするかもしれませんが、「母親が子育てで悩んでいる」と聞けば、いい相談の場があります！と、親子教室に勧誘したりもするでしょう。

それぞれの問題に対しての介入は、一見自然で、適当なものに思えるかもしれませんが、例えば“育て方に迷う”保護者に対して、親子教室などで情報提供を行うことは、子育ての方針を定めたり、定まった方針にそ

って自信をもって育児を行う上で有効に働くかもしれません。しかし、この円環の巡りの中で見ると、外部（親子教室）に育児の支えを求めたことで、父親はさらに『手を出す必要がない』という判断をするかもしれません。また、単純に『お父さんも育児に参加を！』というのは、間違っただけを言っているわけではないのですが、必ずしもその促しがうまくいく公算が高いとは言えないように思います。『運動遊びはお父さんの出番だから！』と持ち上げてみても、日ごろの仕事で疲労していたりすると、“体を使うような役割こそ勘弁を…”と思われたりするかもしれません。

過去に、同じような円環的因果の中で、次のような経過をたどったケースがありました。

図2のような円環的因果の中で父親の協力は得られず1人で疲弊している母親に、息抜きを提案したのです。その母親は少し躊躇していたものの、結局、家族に影響のない時間帯に趣味の教室に通うことにしました。少しでも自分のために使う時間があることは、それはそれで母親にとって貴重であったようです。その後、仲良くなった教室のメンバーから休日のランチの誘いを受けました。これが結果的に、父親が育児に関わるきっかけを作ることになりました。休日に出かけるにあたり、父親に子どもを見てもらうことにしたのです。『最初は気軽に安請け合いしたようですが、自分でみてもたら意外とたいへんだったようで…』『公園から“帰らない！”と言い張って…。普段はどうしているのか？と自分から私に聞いてきました』と母親は笑って語って

れました。父親にとっても、よく知らない専門家から説教面で「お父さんも育児参加を！」と言われるより、よほどよかったのではないかと思います。この時の「息抜き」の提案が、個々の問題への直接的な介入ではなく、「よい変化を生み出す」ための介入として機能したのではないかと、振り返って思いました。

今回は、最近知った家族療法の観点から、発達相談の現場で起こることについて振り返ってみました。まだ聞きかじりレベルであり、自分の中でも十分にこなれてはいないのですが、このような柔軟な思考をもって相談に臨みたいと、改めて思った次第です。